

「言わんばかり」考 —慣用表現の成立と展開—

小林 賢次

一、はじめに

「動詞未然形+ん+バカリ」の形式による、

○どうだ、と言わんばかりの態度。 ○泣かんばかりに頼む。

などの慣用表現に関して、先に筆者は国語辞典類の記述を検討し、「ん」を推量の助動詞「ム」の変化形としてとらえる立場と、打消の助動詞「ヌ」の音変化形としてとらえる立場があり、現在なお、その解釈がゆれていることを指摘した〔文献2〕。本稿ではこの問題について、史的文脈の面から考察し、語源的には「ん」は打消の助動詞とみるべきものであることを論証する。また、この事象を手掛かりとして、「ムん」「ヌん」の音変化による同音衝突の問題について考えてみたい。

二、「ん+バカリ」の解釈

この「ん+バカリ」の解釈については、当然のことながら、この表現形式の成立や展開に関して歴史的な観点から把握する必要がある。『日本文法大辞典』（明治書院）の「ばかり」の「補説」では、

「意味」の③で取り上げた「泣かんばかり」などの例における「ん」は、江戸語で「ぬばかり」「ねへばかり」などの形で用いられたり、現代語でもままだ「ないばかり」の形で用いられたりすることから、打消の意とすべきであろうが、その語誌については、まだ定説がない。（倉持保男執筆）

として、湯沢幸吉郎〔文献5〕、此島正年〔文献3〕、西氏の説を紹介している。管見の限りでも、この問題について正面から論じたものとして最も早いのは、湯沢氏の次の論のようである。

「拝まんばかりにしてお願いした」のやうな言ひ方があるが、この「ん」は何か、また「ばかり」の意味如何が問題である。若し「ん」を打消の助動詞「ぬ」と同じものと解すると、「ばかり」は「だけ」の意味に取るより外なく、「形に表して拝むことはいないだけ」のことで、実は拝んだも同様にして願つた「意味になるであらう。しかもこの解釈は今日一般に採用されてゐるかと思はれる。筆者はそれとは違つて、「ん」は文語の推量の助動詞「む」と同じ語で、「思はん子こを法師になして」「やがて散らん花」などの「ん」と同じ用法に立つものと思ふ。是等は口語に「思ふだらう子」「散るだらう花」と直訳は出来ず、口語ではかゝる場合、推量の助動詞を用ひな

いで「思ふ(かはい)子」「散る花」といふのである。(『文獻』二二〇ページ。傍点などの表記は変更あるいは省略したところがある。以下同じ。)

ただし、湯沢氏は、語源としては推量の「ム」に由来するものとしながらも、江戸時代にすでに打消の「ヌ」と考えられるようになったとして、「ヌバカリ」や「ナイバカリ」の例を示している。同氏(『文獻』)においても同様の説明がなされ、『花籃』『梅曆』における「ヌバカリ」の例の他、「ぬ』の代りに『ない』『ぬる』をさへ用いた例が現われる」として、

①眞紙手拭頭巾足袋廢物までそろへて、ハイ御機嫌ようお遊びなさいまして下いはねへばかりにして出すのだけはな(『浮世床』二二上)

②男が手をついて、あやまらねへばかりにしてゐるじやマねへかナ(『辰巳園』八ノ四、一一オ)

③丹次郎と采八が、つかみ合はざるばかりにて入り来りしゆあ…(『辰巳園』七ノ一、三オ)

の例が示されている(『文獻』六八七ページ)。湯沢氏が語源を推量の「ム」に由来すると解釈する理由は特に詳しく述べられていないが、「思はん子」などの説明によれば、古代語において未来あるいは未確定の事態を仮定的に提示した連体用法の場合、「ム(ト)」「の」ように用いられることを重視したものである。

これに対して、「ンバカリ」の成立を「ヌバカリ」に求める立場もある。たとえば、此島正年氏は、

「泣かんばかりに頼む」等の「んばかり」は、「泣くであるう程に」「泣きそつな程に」と解すれば、用言を受けて程度を表わす古代の用法の残存のように見えるが、

「泣きそつな程に」に当る古代の形式は「泣きぬばかりにいへば」(『常木』)等の「動詞連用形プラス完了めプラスばかり」であろう。現代の「んばかり」は多分

露などあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを(古今・十一上)
御衣の御うしろひきつくろひなど、御くつを取らぬばかりにし給ふ、いとあはれ

なり(紅葉賀)

衣裳などはみな濡らして死なぬばかりにて帰らる由(沙石集・八)

のような「打消めプラスばかり」の転化であるうと思う。「ぬ」が東国語法で「な」に変われば

涙をこぼさなればかりにいやがるが(閑情末摘花・三)

ハイ御機嫌ようお遊びなさいまして下いはねへばかりにして出すのだけはな(『浮世床』二二上)

等の形式になる。これらの「ばかり」はやはり限定で、従って本来は「わが身も草におかないだけなのに」「死なないだけの状態で」の意であるが、「草におかないだけ」「死なないだけ」は一步転すれば「草におく」「死ぬ」状態になりかねない意で

あるから、このような状態の具合から「ぬ」が推量「ん」に類推転化し、その結果として「ばかり」があたかも程度の意を表わすように見えるのではないかと思われる。

〔文献3〕

と述べ、この部分は『国語助詞の研究』（桜楓社）にもほぼ同文で収録されている（後述するように、筆者はこの此島氏の見解を妥当なものと考えている）。

また、阿部健二氏は、「バカリ」が活用語を承接する場合の終止形と連体形の問題に関して、『夜の寝覚』の、

④……と、我心の、くやしう、ねたきに、こゑもたてずばかりの心地するを、……（夜の寝覚。日本古典文学大系（以下、大系本）222）

の例を取り上げ、大系本の校注者がこれを「たてんず」と考えているのに対して、中古では「用言十む十ばかり」は稀で、このような用法には用いられていないことを明らかにしている。ただし、『現代語の『泣かんばかり』の表現がどのような経緯で成立したかはまだ不明とせねばならないのである。」として、当該の表現形式の成立については、慎重に結論を保留している（文献1）。

三、「ヌバカリ」等諸形式の成立と発達

以上のように、現代語における「ンバカリ」については、「ン」を打消、推量のいずれにとるか、解釈が分かれているものの、時代をさかのぼると、前述の湯沢氏や此島氏の指摘、あるいは『日本文法大辞典』『日本国語大辞典』などの記述のように、明らかに打消の表現である「ヌバカリ」さらには「ナイバカリ」などの例が広く見られるのである。

『日本国語大辞典』には、「言つ」の子見出した「いわぬばかり」の項目があり、いわぬばかり 口に出して言わないだけ。口に出さ出さないが、態度や様子から明らかにそれと察せられるという意。*虎寛本狂言・柿山伏「いや、是に上て食へと言ぬ斗りの、能いのぼり所が有る」*俳諧・躰野「二・暮春」いまきたといはぬばかりの燕かな〈長之〉*多情多恨 尾崎紅葉 前・二「可厭（いや）な奴が来たと謂（い）はぬばかりである」

と記されている（この項目はすでに『大日本国語辞典』にもあり、ほぼ同様な語釈と狂言「柿山伏」の挙例がある）。大蔵流の狂言台本である虎寛本（寛政四年（一七九二）書写）の「柿山伏」の例は、さらに後の山本東本（大系本）になると、「食えと言わんばかり」の形で継承されていて注意される。虎寛本には、たらい

⑤イヤ、来るほどに、栗を焼といはぬ斗りの、上々のおきが有る。扱々是は能所へ参

た。（粟焼 岩波文庫・下31）
の例もある。

他の狂言台本における例をみると、大蔵虎明本など、近世初期のものにおいては表現が異なり、当該の語形は用いられていないが、宝曆・明和（一七五二—一七七二）頃の書写

と推定されている宮島伝来の大蔵流台本、伊藤源之丞本（米子高専国語研究室刊）に、

⑥……仕合な事じや。是ハ栗を焼といわぬ斗じや。（伊藤本・栗焼 上142）

の例があり、虎寛本よりもやや先行することになる。また、伊藤本と同様、大蔵流八右衛門派の台本である虎光本（文化十四年ハ一八一七）虎光書写の転写本、古典文庫所収の山岸清齋書写本による）にも、

⑦されば杜是ニ栗を焼と言ぬ斗リの上々の火がおこつて有ル。（虎光本・栗焼 古典文庫・1216）

⑧イヤ是へ登て喰といわぬ斗リの一段の処が御座ル。（同・柿山伏 1329）

⑨鳥先ニあの松を植いといわぬ斗の空地が有ル。（同・富士松 121）

と、虎寛本とは同一の表現がとられている（例⑨は他本には見られないものである）。また、和泉流の台本においても、天理本『狂言六義』など近世初期のものにはさかのぼれないが、近世後期の台本には、

⑩やれくよい処へ来た事哉 是ははや栗をやけといはぬ計の所へ来た（古典文庫本・栗焼 一九10）

⑪はあ。これは栗を焼かうと云はぬばかりに。重畳の炭火がおこしてある。（二百番集本・栗焼 上241）

と、ほぼ同様の例が認められる。すなわち、近世後期、固定・伝承期の台本においては、特に「栗焼」の炭火を見つける場面で「……と言はぬばかり」の表現をとることが定着しているのである。

次に、狂言以外のものに目を向けてみよう。近世初期までの例として管見にはいったもののに、次のようなものがある。

⑫総シテ。塵ノタツニハ。水ヲ洒ク者ゾ。御遊アレト云ハヌバカリナル天気也。（中華若木詩抄、寛永版上44オ）

⑬今ノ浮世ハ。才名アルモノハ。人ニ。シコチラレテ。細々流罪ニ逢フト。云ワヌバカリゾ。（三体詩素隠抄、一・二39ウ。抄物大系 上234）

⑭アラ。ハカナノ。ワガ心ヤト。イワヌバカリゾ。（同 三・三5オ。下337）

⑮まへひぢぢをかっぱとをり、りやうがんより、きなるなみだをこぼひたは、にんげんならば、のれといはぬばかりなり（をぐり〈繪巻〉六。『説経正本集』 1361）

⑯各の御あつかひ御無用是非つちはたし申さんなどいふて腰刀ひねくりまはす、これたゞ此口論をよきやうに御あつかひくだれよといわんばかりのしかたなり（身の鏡・下・口論の事。『仮名草子『身の鏡』繪索引』〈新典社〉77）

いずれも、「……と言はぬばかり」の例で、……と口に出してこそ言わないが、言ったも同様の意味に解されるものである。室町時代の抄物では、今のところ例⑬の『中華若木詩抄』以外には、このような「ヌバカリ」の例を見出していない。『三体詩素隠抄』には慣用的に用いられており、すべて「……ト云ハヌバカリゾ」の形で計二三例を数える。同抄

は、元和八年(二六二二)の刊であり、抄者素隠は當時の人であるので、説経節の例⑩などと同様近世初期のものといふことになる(抄物大系、谷沢尚一氏解説参照)。なお、例⑩の「身の鏡」は万治二年(二六五九)の刊行であり、「言はんばかり」に転じた早い例として注目される。同書には打消「ヌ」の連体形「ヌ」が五四例用いられているが、「ン」に転じたものは例⑩の一例のみである。「ンばかり」の慣用表現化を物語るものであろう。

以上、室町時代から江戸時代初期にかけて、特にこの「……と言はぬばかり」の表現が慣用的に用いられていたことが知られる(註一)。さらに近世中期頃に至ると、「ヌばかり」の形式そのものがかなり一般化していたようであり、近松や西鶴の作品には、「……と言はぬばかり」のみならず、「言々」以外の表現も多く用いられている。『近世文学用語索引』(教育社)によって検索すると、次のような諸例が認められる(近松作品の引用は、『近松全集』〈岩波書店〉により、索引のページ数と併記する)。

〔近松世話浄瑠璃〕

⑪「よ、いやらし手がけがれたと。たぐつて庭にひらりと投げ。ひろへといはぬ計成思ひのやみや詮かたなき。(鐘の権三重帷子・上701。全集10165)

⑫「銀さうごう一し投出し。はちう出していけ〜といはぬ計に門の方。をしゆる手さへ引入るれば。(博多小女郎波枕・中920。全集10789)

⑬「をひたをされていきた心もせぬ所に。請出す談合極まつて手を打ぬ計と云。」(真途の飛脚・上169。全集12283)

⑭「あのごし様や此かゝは今のいづく人中で。ふまれぬ計にはぢをさき。いひさげられつもそなたをたくが嬉し。」(夕霧阿波鳴渡・中705。全集12283)

〔西鶴浮世草子〕

⑮「見ぬ人のためといはぬ計の風義」(好色五人女・三135)

⑯「人めなくはほしり出てといはぬばかりに見をける」(男色大鑑・六674)

⑰「一疋は流れ木をひろひ集めて抱へ、また一疋は、ほし着を持って、物いはぬ斗、人間のいづく、かじふをきけて居」(西鶴浮世草子・五153)

⑱「着板つたぬばかり北国者にかくれもなき男」(男色大鑑・五707)

⑲「板屋もしらぬばかりの雨をり、」(同・六118)

以上、近松世話浄瑠璃の場合、『近世文学用語索引』所載一二作品中の全用例を示した。西鶴浮世草子の場合、掲出例のほかにも四例「ヌばかり」が見られるが、「……と言はぬばかり」は、例⑯の一例のみである。これらはいずれも「……しないで、したと同様のく」という意味に用いられたものである。『日本国語大辞典』所引の俳諧『躰野集』における「いままたといはぬばかりの燕かな」も同様のものである。此島氏「文獻」などに説かれているように、この場合「ヌばかり」は限定の意を表し、「ヌばかり」全体では一種の比喩的表現となっている。湯沢氏の「文獻」には、近世後期江戸語以降の使用例の

みが挙げられ、同氏『徳川時代言語の研究』にはこの用法についての言及がないが、すでに近世前期の上方語において、このような比喩的用法の「ヌバカリ」は、きわめて一般的な表現となっていたことが知られるのである。

それでは、このような「ヌバカリ」の比喩的表現は、どの時代にまでさかのぼるのであるか。中古における「バカリ」の用法をみると、関連するものとして、古語辞典等に掲げられているように、

②言に出でて言はぬばかりぞみなせ川下に通ひて恋しきものを(古今集 恋二・六〇七)

のような例がある。これは△言葉に出して言わないだけだぞ△の意で、打消の助動詞に「バカリ」が付き、限定の意を表すものである。ほかに

③ふる雪に物思わが身おとらめやつもりく〜てきえぬ許ぞ(後撰集 八・四九六。よみ人しらす)

④京に侍ける女子をいかなる事が侍けん心うつとてとめをきていなばのくにへまかりければ

打すて君しいなばのつゆの身はきえぬ許ぞ有とたのむな(同 十九・一三三。むすめ)

⑤御ぞのうしろひきつくろひなど御くつをとらぬばかりにし給いとあはれなり(源氏物語・紅葉賀。『源氏物語大成』246) 《参考》古真全集本(同部秋生他校注) 頭注 — 「查をとる」は、源氏のために、大臣が查をとること。ここは実際に取るのではないが、取りそつなほどに、の意。左大臣がいかに源氏をたいじにもてなしているかを強調する叙述。》

など、△…しないでく△と解釈できるものがある。これらの「ヌバカリ」は比喩的用法とは言えないであろうが、それに先行し、連続する表現と認められる(注2)。一方、同じ「ヌバカリ」の形でも、完了の助動詞「ヌ」の終止形に「バカリ」が付き、△…してしまふほど△という程度を表す用法もある。

⑥かく年ころはきえぬばかりにつけたまはりなれたれば、たれもおぼつかなくは思さずやとてなん。(かげろふ日記・下・天禄二年二月) 《参考》『かげろふ日記総索引』(佐伯梅友・伊牟田経久) 脚注 — 諸書「ぬ」ヲ打消ト解スルガ、今ハ完了ト解ス。「おちぬばかり」(一〇四⑥)、「なきぬばかり」(一五四②) 参照。》

⑦後なる人々は、おちぬばかりのぞきて、うちあらはすほどに。(同・中・天禄元年八月)

⑧「とく〜」と、手をとりて、泣きぬばかりにいへば。(同・中・天禄三年八月)

例③は、接続からみて「ヌ」が完了であることが確実な例であるが、例⑥⑦などは打消「ヌ」ともみられ、その解釈が問題となる。ともあれ中古においては、一、二段助動詞「ヌバカリ」が接続した場合、「ヌ」が打消の助動詞の連体形か、それとも完了の助動詞

の終止形かという接続及びその解釈がもっぱら問題となるのであり、推量の助動詞「ム」に「バカリ」が下接した「言はむばかり」のような例はまず認められないのである（『源氏物語大成』によれば、打消ヌバカリ5例、完了ヌバカリ8例・ヌルバカリ1例、推量ムバカリ1例・ムナドバカリ1例）。このことから考えて、「ヌバカリンバカリ」が本来のもので、「ン」を推量の助動詞のように解するのはむしろ現代の誤った語源意識によるものだと行ってよいであろう。ちなみに、『源氏物語』における「ムバカリ」は

③③ たいとおしきおやの思ひなしをきき、あきらめはべらむばかりなんうれしつ心やすかるべきなど、むかしよりのふかへりしかたの心ばえをかたり給（夢浮橋 2061）

と、「ナム」を下接し、主題として提示するもので、阿部健二氏「文献1」の指摘もあるように、この問題としていろいろな比喩的用法に連続するものではない。

中古から中世にかけての諸文献の調査は十分ではないが、問題となるのはやはり「ヌバカリ」の「ヌ」が打消か完了かという点に尽きるようである。この点については、先に引用した阿部氏「文献1」や、山本清氏「文献4」の論考を参照されたい。

なお、打消の「ヌバカリ」に類似する表現として、『平家物語』に次のような「…ぞと言ふばかり」の例が見られる。

③④ 夜るはいぬる事なく、昼は終日につかへ、木をきり草をからずといふばかりに随ひつゝ、いかにもして敵をうかすひ打て、いま一度旧主を見たて奉らんと思ひける兼康が心の程こそおそろしけれ。（寛一本平家・八・妹尾最期。大系本・下144）

《大系本（高木市之助他校注）頭注——木を切り草を刈るといふことこそしないが、外のことなら何でもするといふ程度に。」「…ぞといふばかり」の類例四一七頁一六行。》

③⑤ 平家の子孫は去文治元年の冬の比、ひとつ子ふたつ子をのこさず、腹の内をあけて見ずといふばかりに尋と（ツ）て失て（シ）ぎ。（同・十一・六代被斬。下417）

これらは「ヌバカリ」と共通の表現内容となっている。このような表現は、一方では次のような肯定形式による比喩的用法と類似したものとなる。

③⑥ ……として、直衣の袖もしほるばかりに涙をながしかきくどかれければ（同・二・烽火の沙汰。上175）【巻七】「主上都落」にも類例

③⑦ 師のすけ殿つくく月をながめ給ひ、いとおもひのすいでもおはせせらければ、涙ごとくもつゝばかりにて、かうぞおもひつゝけ給ふ。（同・十一・内侍所都入。下344）

これらは活用語に「バカリ」が直接に接したものである。この例③⑥⑦のように、活用語に程度を表す「バカリ」が接続して「……しそつなほづくの意を表す例は、中古以来、継続して用いられてきているものである。「淨くばかり」などの箇所を完了の助動詞「ヌ」を伴って「淨きぬばかり」の形にするかどうかは、表現上の意味的な問題であって、重要なのは、『平家物語』などにおいても、推量の「ム」を用いた「淨かむばかり」のような

形は用いられていないというところである。

以上見てきたように、「…と言はぬばかり」などの慣用的な用法の成立は中世、室町時代以降のこととみられるが、その前提となる「ヌバカリ」の形式による「……しないだけ」という限定的な用法そのものは古くから存在しており、それが現代の用法にまで連続しているものと考えられるのである。

四 近代語における「ヌバカリ」「ンバカリ」等

ここで、明治期以降、近代におけるこの形式の使用状況を簡単に見ておくことにする。樋口一葉『たけくらべ』に、次の「…と言はぬばかり」一例がある。

③見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋知らぬ五丁町の賑ひ（『たけくらべ総索引』

《全閣書》479）

『作家用語索引』（教育社）で調査すると、夏目漱石の作品には「ヌバカリ」、それも「…と言はぬばかり」の使用例が目立つが、「ンバカリ」さらには「ナイバカリ」の例も見られる。例を示そう（本文の引用は『漱石全集』へ岩波書店へにより、索引のページ数と併記する）。

③主人はそれ見たかと言はぬ許りに、膝の上に乗った吾輩の頭をぼかと叩く。（吾輩は猫である・1945。全集146）

④余の顔と女の顔が触れぬ許りに近付く。（草枕・92039。全集1491）

④「希臘語云々はよした方がいゝ、さも希臘語が出来ますと云はん許りだ、ねえ苦沙弥君」（吾輩は猫である・12057。全集197）

④私の凡てを聞いた奥さんは、果して自分の直覚的中したと云はないばかりの顔を出しました。（つづろ・153886。全集185）

④代助は暑い中を馳けない許りに、急ぎ足に歩いた。（それから178511。全集4821）
漱石の作品における「ヌバカリ」以下の用例数を下接語別に示すと次のとおりである。

ヌバカリニ……………一七（二二）	——ダ……………一
——ノ……………一七（二七）	ナイバカリニ……………一〇（一一）
——テアル……………二（二）	——ノ……………二（二）
ンバカリニ……………一（〇）	
——ノ……………五（五）	計 六五（四九）

注（ ）内は「…と言はぬ（ん・ない）ばかり」の例（内数）。

「ヌバカリ」はすべて地の文に用いられており、会話文では用いられていない。「ンバカリ」七例のうち、会話文中のものが例④のほか二例あるが、それ以外の点では「ヌバカリ」との相違は特に認められない。また、「ナイバカリ」の場合、手紙文中の例④を含め

て「二例中三例が会話文中のものであるが、表現内容としてはやはり「ヌバカリ」と同一とみてよいようである。ただ、「ンバカリ」の場合、一例を除いて他はすべて「…と言はんばかり」の形をとっているのに対して、「ナイバカリ」の場合は「…と言はないばかり」の形をとることは稀である。これは「…と言はぬ(ん)ばかり」の表現が、それだけ固定化・慣用化していることを示すものであろう。なお、これらの形式の使用状況を見ると、特に執筆年代、作品による偏りを指摘することは困難なようである。

ちなみに『作家用語索引』所収の作家の範囲では、森鷗外と志賀直哉はこのような「ヌバカリ」などの表現を一例も用いていない。一方、芥川龍之介の作品には

④④五位は、殆どべそを掻かないばかりになって、呟いた。(羊粥235)

④⑤…膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに堅く、握っているのに気がついた。
(羊巾151)

のように「ナイバカリ」の例のみ六例見られるが、「…と言はないばかり」の表現は用いられていない。また、太宰治の作品には

④⑥その最初の喧嘩の際、汐田は卒倒せん許りに興奮して、しまいに、滴々と鼻血を流したのであるが、(列車11)

④⑦老父義盛さまは、その悲報をお聞きになって、落馬せんばかりに驚き、(右大臣実朝82)

という「ンバカリ」二例が見られるが、やはり「…と言はんばかり」は用いられていない。こうした使用状況からみると、この種の慣用的な比喻表現形式を用いるか否かという点には、個人の好みが強くと反映していると言えようである。特に「…と言はぬ(ん)ばかり」は、漱石費用の表現形式の一つであったと言えるであらう。このような点は文体的な観点から問題になりそうであるが、本稿の目的から離れるので、ここでは以上の指摘にとどめる。ともあれ、近代、明治以降において、「ンバカリ」の形式は「ヌバカリ」及び「ナイバカリ」と共存し、明らかに打消の意識で用いられてきていることが確かめられるのである(註3)。

五、「ムクン」「ヌクン」の変化による同音衝突

最後に、「ンバカリ」の「ン」の解釈がゆれる背景にあるものとして、推量の助動詞「ム」、打消の助動詞「ヌ」の音変化の問題に広げて考えてみたい。「ムクン」の変化は古く中古にさかのぼるのに対して、「ヌクン」の変化は室町時代頃生じたものであろう。此島正年氏は『国語助動詞の研究』(桜楓社)で、さらに古く『井内侍日記』中の和歌に「ふはもたむ」の折句で「譜は持たん」すなわち所有しないことを言ったとみられる例を指摘しているが、解釈上の問題もあるようである。

日本古典文学大系『仮名草子集』の補注で校注者の森田武氏は、

④⑧汝が頼しやぶつと食いきらぬも、今それがしが心にありしを、助けをくこそ汝がため

には報恩なり」(仮名草子・伊曾保物語 中・鶴と狼の事。407)
の例が「食いきらむ(ん)」「とあるべきものであることに関連して

本来「む」あるいは「ん」と書くべきを、「ぬ」と書いた例は、他の書にも散見する。「我々いかでかをろかならぬ、姫君にも対面して、もろともにかしづき参らせ候はん」(御伽草子、木幡狐)、「いかならぬ宮腹の姫君といふとも、かゝる姿は有まじ」(同右)、「われ故郷へ、帰らぬまでは、難なくまぼらせ給へ」(同右)、「命あらば又もやめぐり見もやせん結びの神のあらぬ限りは」(御伽草子、猿蓑氏草紙)。

打消の助動詞「ぬ」は、中世末葉の口語ではすでに「ん」ともなっていたらしく、「ン」または「ん」と書いた例がある。「秦漢ノ時不耕不耘ウチ棄テヲクト云心也。スキクワモ入ン也」(襟帯集、四一裏)、「表紙ハ入ン也」(同右、六丁裏)、「したしたまではしなる心もち候はんように申しつけ候はん事せんにて候」(秀吉書状、文禄三・四・廿二、松丸殿宛)。

の例を指摘し、「ぬ」と「ん」とを相互に「書きひがめること」があったと述べている。たしかに、近世の初めあたりには、共通の形式「ン」を媒介として、このような「ヌ」と「ム」との混同が生じていたようである。慶長三年梵書寫の『沙石集』(大系本)にも

④9 サレバ世間ノ事ハ無始ヨリナレキテ、名利ヲ思ヒ、恥辱弁テ、カケクミ打合、身ヲワスレ命ヲ捨ヌ事ハ、(沙石集・三150) 《参考》一 底本頭注、長本(注、京都大学附属図書館本)「捨ル事ハ」。他ノ諸本「捨ン事ハ」。底本の「ヌ」は「ン」の音を写したもののか。この誤り散見する。》

⑤0 「其故ハ、地獄ノ釜ノ尻ヲ、ツキコボシ候ワヌ為ニヨトソ云ケル。(同・六284)

⑤1 「……若聖靈浄土ニ生シ給ハズハ、此法師ガ一生ノ頭、七キダニ被切候ワヌ」トソシケル。(同)

のように、推量の「ム(ン)」「にあたるところに「ヌ」を用いた例が散見すること、大系本(渡辺綱也校注)の頭注(例④9参照)に説くごとくである。こうした事實は、「ン」の語形がもともと不安定で、ともすれば他と紛れやすい性質を持っていたことを物語る。

周知のごとく、室町時代の口語においては、推量の「ム(ン)」はさらに転じて「ヌ」の段階に至っている。したがって、近世の上方語において、打消の助動詞が「ヌ(ン)」の変化を起すことも、通常、同音衝突の問題は生じない。これに対して、文語的な慣用表現になると、「あらぬ限りの力」「幸多からんことを祈る」「せんかた無し」など連体法をとる「ム(ン)」の存するところに「ヌ(ン)」が進出してくることになり、同音衝突の事態を招いたのである。現代の共通語では、この事態を回避するためか、打消の場合には、慣用的な表現においても一般に、「見知らぬ人」「あらぬ疑い」「言わぬが花」など「ヌ」の形がそのまま用いられ、これらは普通「ン」の形をとるにたがない。すなわち、連体(及

び準体)用法の文語的・慣用的表現においては、「ヌヅン」の移行は推量の「ムヅン」の勢力に押しとどめられているのである。

以上の点から考えると、本来打消の「ヌバカリ」に由来する「ンバカリ」が、現代において、しばしば「今にも……」のような状態でくの意味に解されるのは、そもそも「ン」の形をとるようになったこと自体に問題があるのだと言えるであらう。連体法の「ン」は推量の「ム」と解釈されやすくなり、現代では「ンバカリ」の形で否定の意味機能をなうことが次第に困難になりつつあるのである。

(注1) 『大草本平家物語』以下のキリシタン口語文獻の総索引、『下チリナキリシタ』『ぎやどべかどる』などキリシタン文語文獻の総索引を検索したところでは、「ヌバカリ」の例は見られなかった。『サントスの御作書』『スピリツアル修行』など、豊島正之氏のKWIIC索引でも同様である。その他、『御伽草子』『きのふはけふの物語』『おあん物語』『雑兵物語』『捷解新語』(原刊本・改修本・重刊本)などにもこの種の例を見ない。

(注2) 古典文学全集本の頭注における「実際に取るのではないが、取りそうなほどに」の意。「という解釈は、現代の「取らなばかりに」の表現と同一のものともみなしているようにあるが、疑問。ここは、「くつぎ」自ら取りこまないけれども、ほかのことは何でも」のような意味に解すべきものであろう。

(注3) 現代ではほぼ「ンバカリ」に固定しているようであるが、「…当然と云わぬばかりの表情」(松本清張『鴉』四。全集《文芸春秋社》三八七)、'早く帰れと云わぬばかりなんです。'(同『強き鐵』八。全集三二九〇)のような「ヌバカリ」の例も見られ、清張作品では「ンバカリ」と共存している(小野正弘氏告示)。

〔引用・参考文献〕

- 1 阿部健二(一九七〇)『活用語を承ける『ばかり』』(人文科学研究・五〇号)『国語文法史論考』(明治書院 所収)
- 2 小林賢次(一九四四)「『言わぬばかり』考—国語辞典類の意味記述をめぐって—」(日本語研究・一四号)
- 3 此島正年(一九六五)『助詞『のみ』と『ばかり』の通時的考察』(日本文学研究・二四号)『国語助詞の研究』(桜楓社 所収)
- 4 山本 清(一九七二)『副助詞にあらわれる平安語法の特徴—副助詞「ばかり」の考察—』(学芸国語国文学・七号)
- 5 湯沢幸吉郎(一九四四)『現代語法の諸問題』(日本語教育振興会。一九八〇、勉誠社復刊)
- 6 湯沢幸吉郎(一九五七)『町江戸言葉の研究』(明治書院)
(こばやし けんじ・東京都立大学教授)